書評

楊儒賓『1949 礼賛』

楊儒賓『1949 禮讃』

伊東貴之

聯經出版、2015 年

本書は、二〇一五年九月に公刊されるや、台湾の学術界や一般社会において、大きな波紋や様々な反響を呼び起こした点でも、今なお記憶に新しい。なお、本書の構成は、以下の通りである。

まず、国際的にも著名な中国文学者・比較文学者で、ハーバード大学教授、台湾・中央研究院院士（日本の学士院会員にほぼ相当）の王徳威（ワンドゥーウェイ）氏による「序一 納中華入台湾（中華を納めて台湾に入れる）」、次いで、著者の楊儒賓（ヤンルービン）氏の大学時代の同窓で、趨勢教育委員会董事長・執行長の陳怡蓁（チェンイーチェン）氏による「序二 黄土地輿藍海洋（黄色の大地と藍色の太洋）」、著者自身による「自序」を巻頭に置いて、全体は四部構成からなり、「一九四九（年）論」、「一九四九（年）と（中華）民国の学術」、「一九四九（年）と（海峡）両岸の儒学」、「一九四九（年）と清華大学」に大別される。多くは、比較的短い解説文やレビュー、講演原稿などからなり、そのためもあってか、文字どおり、極めてセンシティヴな問題を扱い、複雑で多義的なニュアンスを含むものの、語り口は存外、平易でもある。多少の重複も、かえって読者の理解を助ける一面もあろう。

著者の楊儒賓氏は、一九五六年、台湾・台中市の出身で、台湾を代表する中国文学者、中国哲学・思想史家として知られる。国立台湾大学で学位を取得した後、国立清華大学中国文学講座教授などを経て、現在は、同・哲学研究所の教授の任にある。専門は、先秦時代の儒学から、宋明理学、東アジアの儒学と幅広く、『儒家身体観』（台北・中央研究院中国文哲研究所、一九九六年）、『異議の意義：近世東亜（東アジア）の反理学思潮』（台北・国立台湾大学出版中心、二〇一二年）などをはじめ、多くの著作や編著、訳書を陸

続と公表されて、極めて精力的に研究を展開している、斯界の権威とも言うべき存在である。ここで、私事に亘って、甚だ恐縮ではあるが、実は評者自身も、台湾や中国での国際シンポジウムなどの折には、何度か拝眉の栄に浴して、著者の懐の深い、明朗な人となりと学問的な見識には、深い畏敬の念を覚えている。また、甚だ僭越ながら、本書に接した最初の率直な印象や感想としては、著者のような学究肌の碩学が、動もすれば、時局的とも受け取られかねない、広く一般社会に向けた著作をものされたことに、些かの疑問や戸惑いを覚えたことも、正直に吐露しておきたい。しかるに、一読して、そうした懸念は忽ち払拭されて、むしろ本書は、古来、中華文明が育んだ学術・文化に対する、著者の深い敬愛や愛惜の賜物であり、ある種の情熱やパトスの所産でもあることが、改めて感得された。

さて、今更、喋喋するまでもなかろうが、一九四九年という年は、台湾にとって、否、広く戦後の東アジアや世界の歴史においても、極めて重要で、象徴的な含意を有した、ある種の記号のような意味合いを帯びた年でもある。それは、国共内戦に敗れた蔣介石の率いる国民党や国民政府が、台湾に逃れて、中華民国政府を樹立した年であり、すなわち、中華民国の「遷台」ないしは「南遷」として、同時に、新たな台湾の出発点としても、歴史に刻印されている。著者によれば、中国史上で言えば、四世紀の永嘉年間に西晋が江南に「南遷」して、東晋王朝となり、また、十二世紀の靖康年間、北宋が潰えて、南宋が誕生したことにも比肩する大事件であるとされ、台湾や漢民族に即して見るなら、一六六一年、鄭成功がオランダ人を追放して、台湾を領有し、その後、漢民族の台湾への移民が始まったこと、一八九五年、日本に植民地化されたことに次ぐ、大きな歴史的な画期とされる。

そして、戦後台湾の歴史を繙くなら、まずは「光復」の後、まだ間もない時期に血塗られた経験、取り分け、二・二八事件やその後の白色テロなどは、永らく戦後台湾の傷痕として、痛苦を伴って記憶された。帝国日本に代わって、新たな支配者となった国民党政府を評して、「犬が去って、豚が来た」と揶揄する俗諺が生まれたことは、余りにも有名であるし、読者の中には、二・二八事件を題材とした、台湾を代表する世界的な映画監督・侯孝賢（ホウシャオシェン）の『非情城市』（一九八九年、ヴェネチア国際映画祭グランプリ受賞）を御覧になられた方も、多いのではないかと思われる。その後の国民党の一党支配体制の時期における、「本省人」と「外省人」との間での様々な軋轢や葛藤、いわゆる「省籍矛盾」や多様な「族群」（エスニック・グループ）の重畳する政治・社会構造の抱える解決困難な諸問題についても、最早、贅言を要すまい。よく言われる台湾の人びと（特に本省人）の「親日」感情も、こうした反国民党、反外省人という、鬱屈した感覚の底流に加えて、大

陸中国との政治的な相剋や対抗といった文脈の中でこそ、理解される必要があることもまた、言を俟たない（呉濁流『夜明け前の台湾――植民地からの告発』社会思想社、一九七二年、また、龍應台〔天野健太郎訳〕『台湾海峡一九四九』白水社、二〇一二年、何義麟『台湾現代史――二・二八事件をめぐる歴史の再記憶』平凡社、二〇一四年など、参照）。

翻って、この戦後台湾の傷痕とも言うべき「一九四九年」を「礼賛」するとは、如何なる仕儀なのであろうか?……。慥かに著者は、本書において、基本的には、一九四九年という年について、また、この年に「中華民国」が台湾に「遷移」したことを肯定的に、ポジティブに捉えるべきであると提唱する。しかるに、著者が肯定するのは、その後、長年に及んだ国民党による権威主義的な統治や中華民国という国家なり、政治体制そのものではない。著者によれば、（台湾）海峡両岸の人びとにとって、それぞれに異なる一九四九年の意義というものが存在しており、大陸中国においては、如何なる立場に立つにせよ、それはやはり主として政治的な意義であるのに対して、台湾においては、むしろ文化的な意義が大きく突出しているものと評価される。それは、「中華文明」や「中華文化」にとっての一九九四年という年、あるいは、それ以降の「台湾」が有した意義と言い換えても良い。周知のように、大陸における民国期の学術は、伝統中国の学術・文化の精華を継承しつつも、五・四運動の精神の発揚などとも相俟って、そこに西洋由来（日本を媒介や経由したものを含む）の学術やモダニティを接続・折衷して、新たな中国（文化）独自のモダニティを形成した。著者によれば、一九四九年以後の台湾こそは、かかる民国学術の達成やエッセンスの正統な継承者なのである。かくして、こうした中華文化の新たな資源や成果は、一九四九年以降、台湾での越境的な文化経験をも媒介としつつ、中国大陸や香港を含む、いわゆる「両岸三地」において、一定程度、共有化された。また、その後の台湾にあっては、東西の文明や価値観を融合させた、新しい華人文化を生み出し、様々な紆余曲折を経ながらも、自由で民主的な国家や市民社会の建設を成功裡に進めつつある。

これは、一読して、台湾における国民党史観、ないしは、統一派からも、いわゆる本土派や（台湾）独立派からも、俄には受け入れ難い主張であって、実際、その双方から、激しい議論が沸き起こった（――因みに、台湾の中等教育課程では、曾ては、中国史と外国史という括りで、自国史としては、主として中国大陸の歴史（＋戦後の台湾史）が教授されていたが、現在では、台湾史との三本立てになっていることなども、戦後台湾の置かれた状況や推移を象徴的に表していよう。）が、逆に存外、好意的な意見も散見されるなど、何れにしても、多様な議論の呼び水となり、様々な波紋や反響を招く結果となった。同時に、飽くまでも、学術・文化の局面に限って

見れば、また、著者の表現に藉口するなら、自由経済・民主制度・生活様式・文化様式といった生活世界に即して見るなら、かなりの程度、正鵠を得た、存外、穏当な評定かとも見受けられる。

もっとも、評者としても、著者のすぐれて戦略的な卓見の提示の仕方に対して、大きな共感を覚えると同時に、些かの疑問を禁じ得ない部分も残る。まず、「中華文明」や「中華文化」の転変やその台湾への「遷移」をポジティブに捉えている以上、また、それを齎したのが、やはり「中華民国政府」の「遷台」ないしは「南遷」であった以上、ある種の政治性とは全く無縁に、その成果を強調することには、些か勇み足の感が伴うのではあるまいか？……。この点、むしろ独立派からの反撥の所以でもあろう。実際、戦後の台湾において、国家としての中華人民共和国や伝統文化を批判・破壊した文化大革命との対抗上、中華文化復興運動と称されるムーブメントが展開された経緯もある。台湾の固有文化を強調したり、「中華文明」や「中華文化」に対する愛惜を共有しない立場からは、文化的な側面に限定されているとは言え、事大主義的な態度とも映りかねない。翻って、中華人民共和国という政治体とともに、戦後の中国大陸における思想・文化的な動向や達成に関しても、敢えて無視して、これを黙殺している嫌いも無しとはしない。

その他、評者には、著者の姿勢はまた、やはり台湾出身で、長年、日本で教鞭を執った農業経済学者で、曾ての国民党一党支配体制下では、むしろ危険人物視されるという憂き目にも遭った、故・戴國煇氏（立教大学教授）の「政治中国／政治台湾」といった実体的な対抗軸に回収されない、より広い原基としての「文化中国」への深い愛着などを想起させるものがあった（『戴國煇著作選』Ⅰ・Ⅱ、発行＝みやび出版／発売＝創英社・三省堂書店、二〇一一年、また、拙稿「境界人としての多層的、重層的主体――歴史や国家への深い洞察、台湾史研究や華僑・華人史研究のパイオニアとして」、『週刊読書人』第二九〇三号、二〇一一年八月二十六日号、参照）。但し、台湾のある種の「辺境」性を強調する戴國煇氏に対して、著者の場合は、如上の経緯からも、むしろ現代の台湾でこそ、「中華文明」や「中華文化」の遺産や精華は、赫奕として燦然と輝いていると見る訳であって、そこには、善かれ悪しかれ、「東洋文化」の精髄が、日本でこそ保持されているとした、岡倉天心（『東洋の理想』）などとも、一脈通じるような姿勢が見受けられ、その意味では、翻って著者の「台湾」という「本土」への愛着にもまた、強いものが感じられる。何れにせよ、幾重にも屈折に富んだ、著者の叙述や言説の襞を大いに味読したい。

因みに、本書の公刊の後、既に中文での書評としては、管見の限りでも、呉冠宏「漢華文化的探照燈――読《１９４９　禮讃》」、江燦騰「対話楊儒賓：１９４９漢朝東流与第四類新詮釈学的提出」、

張崑将「《１９４９　禮讃》中的「中華」禮讃」、顔訥「納中華入台湾的１９４９創傷癒候、与発明新台湾的可能：読《１９４９禮讃》」（以上、『文化研究』第二十二期、台湾・文化研究学会、二〇一六年春季）、林桶法「禮讃背後的省思――評楊儒賓《１９４９禮讃》」（『二十一世紀』（双月刊）総・第一五九期、香港中文大学中国文化研究所、二〇一七年二月）などが存するほか、本書の著者の楊儒賓氏自身もまた、その後の思索や本書に対する反響を踏まえて、楊儒賓「導論：該禮讃或詛咒――《１９４９　禮讃》的反思」（『文化研究』第二十二期、二〇一六年春季）を執筆されている点を附言しておきたい。御関心の向きにおかれては、是非とも、就いて参看されたい。

なお、既に本書の邦訳として、中嶋隆蔵訳『１９４９礼賛――中華民国の南遷と新生台湾の命運』（東方書店、二〇一八年六月）があり、平明で達意の訳文とともに、懇切な「訳者あとがき」や「本書所見人名生没年一覧」もまた、ともに読者の理解に大いに裨益するものである。中国語を解さない読者におかれては、是非とも、この訳書を一読されることをお勧めしたい。また、既に日本語による書評としても、家永真幸「台湾の１９４９年を礼賛する論理とは」（『東方』四五三号、東方書店、二〇一八年十一月号）があり、問題の所在や本書の意義について、適確に論評している。